

## 「空気の狭間」

私達が当たり前のように呼吸し日々を送っているこの空間。

私達はこの透き通って見える空気の層を目の前に、自分はこの空気の中にあるものを全て見ていると思込んでいる。

日々次々と起こる個人的社会的問題はその都度解決され時間や空間は積み上げられていると思っている。

本当にそうだろうか。

地面に落ちた落し物は拾わなければ落ち葉が積もり、いつしかその存在は見えなくなってしまう。

人々は常に地面の表面を見て世界を把握した気になっている。

巡る季節の中で幾重にも積み重なった分厚い落ち葉の層には、今も様々な落し物が封じ込まれているはずだ。

私達が呼吸するこの空気や空間の中にも、置いてきぼりにされた人々の想いが封印されている。

届けられなかった想い、伝わらなかった真実、呑み込んだ言葉、力によってねじ伏せられた想い、叶わなかった夢。

人の世の大ざっぱで雑な意識の流れの中、空間の隙間に取り残され重なる空気の向こうに見えなくなったものたち。

でもきっとその想いや心や真実は無くなった訳ではない。

そればかりか、それらこそが強欲とエゴで崩壊しそうなこの空間を内側から支えているのかもしれない。

見栄えのいい化粧板の外壁で覆われているビルを見て私達はそのビルを認識した気になっているが、

実はそのビルを支えているのは内側の柱や梁や配管や配線だ。

空気の狭間には社会や時代の見栄えと体裁によって封印された個々人の想いが存在している。

一見とてもか弱く見えるそれらの想いは、人知れず空気の狭間で発光し、

困難に差し掛かった人の意識に映り、励ましたり癒したり勇気づけたりしているかもしれない。

そんな尊いスピリットが住む領域にアクセスするツールを、原木を手斧で叩き刻み、空間に出現させたい。

安藤 榮作